

鑑かがみハルとマッチングアプリで知り合ったのは、つい先月のことだった。

あの、とても美しい男性。イケメンなんてものではない、『美しい』のだ。私は、鑑ハルの自撮り画像を最初に見た時、20秒は彼の目を見つめていた。まるで宝石のような、きらめく赤い目。少し癖毛はあるけれど、柔らかな黒髪。ほくろのない、つるりとした荒れを知らなさそうな肌は羨ましいくらい。それから女性ウケを狙ったような、いかにも今どきの学生といった風情のカジュアルな服装はとてもあざとかったけれど——とても似合っていた。

あまりの美しさに本当は詐欺や釣りの可能性でも疑うべきだったのだけど、それでも私は気が付けば鑑ハルにメッセージを送っていた。「自撮り、とてもかっこいいですね」と正直なことは言えなかったから、「中田ヤ○タカが好きなんです」とか、かえって変なメッセージを送ってしまった。

それでも、彼はやさしく返事をしてくれた。

「そうなんだ👀しおりちゃんは何の曲が好きとかある？」

「チョコレート○トディスクとか…」

「へえ！オレも好きだよ❤️ねえ、オレたち気が合うね。もっと話してみたくなっちゃったけどいいかな…？」

そんな他愛のない会話から発展して、ついに明日、鑑ハルとリアルで会うことになったのである。

どうしてそれを今思い出すのか。自分の今の状況があまりにも突飛で、異常で。

……全く無関係なことでも考えていないと、現状が到底受け入れられなかった。

真っ赤な部屋、というところ少し語弊がある壁紙は、ふつうの家屋や店舗ではまず見ないタイプで、扇情的に波打つ金の模様が描かれる。間接照明は暗くていやにやわらかく、視界を悪くしていた。

私はと言うとスカートと下着を脱がされていた。下半身丸出しという変態極まりない格好で椅子に拘束されている。今すぐパニックになって叫びたいのだけど、恐怖が一周まわって頭を冷やしたみたいで、「ひっ」と喉奥をひきつらせるので精いっぱいだった。

更に脚は開いたままになっており、股間には――丸っこいへんな機械のようなものが固定されている。当たる感触自体は危険を感じない――いやでも絶対おかしなものに決まっている。更にその手前には、脚の細いシャンパングラスに、とろりとした質感の液体がなみなみと注がれて置いている。それは艶めいた照明のせいで赤み掛かって見えた。

異常極まりない事態に圧倒されていると、不意に扉が開く。どうやらそれは外に通じる類のもの

ではないらしいというのは、入室してきた人物が――金の文字でこのラブホテル名と思しき文字列が刺繍された――緑色のスリッパをはいていることから容易に察せられた。

「こういう時にお決まりのセリフというやつがある。『お目覚めですか、お嬢さん』……古臭いテンプレートだけど、それでもオレはあえて使うことにしてる。その方が雰囲気であるから。ね、山崎しおりさん。お気分はいかがかな？」

……イケメンなんてものではない。美しかった。少し癖のある柔らかな黒髪と自撮りよりきめ細かく陶器みたいな肌。記憶にあるのとは違い、今は黒いジャケットをピッタリと着ている。そのせいでエッジの利いた身体のラインが浮き出っていて、この異様な状況で尚挑発的だ。そして宝石みたいな赤い目は、そのままこちらを取り込もうとするような怪しいきらめきを湛えていた。

あの、マッチングアプリで出会った鑑ハルそのひとだ、とすぐに理解する。

彼はにっこりと美しく微笑み、呆然とするばかりで何も言えないでいる私を見据える。

「会いたかったよ、山崎しおりさん。……いや、『しおりちゃん』の方がいいかな。あのアプリでは、オレ、君のことそう呼んでいたよね。ふふ。君は自撮りを恥ずかしがって結局送ってくれなかったけれど、とってもかわいい。これなら見せてくれればよかったのに。もったいない」

アプリのテンションのまま一方的に喋り倒す鑑ハルに、私は二の句どころか一の句すら告げられないでいた。だって、あまりにも意味がわからない。だって、

「なんで…私の名前……苗字まで……」

「ああ、ごめん？ちよつとね、こっちの事情で悪いんだけど、素性調査をやらせてもらったんだよ。君のスマホにはアクセスしてない、といえバウソになるけど……個人情報漏らさないから許してね。もちろん用事が済めばすべて破棄する……これで安心できた？」

ぱちん、と鑑ハルはキメ顔でウインクしてみせた。この状況であつても彼に魅力を感じかけた自分に少し驚きつつも首を振る。

「やっぱり？君、結構怖がりだよ。そういうところもまた良いんだけど、それで何かが変わるわけじゃない。君はこれから終わるんだ」

きらりと鑑ハルの目が輝いた。妖艶な照明を受けてさらに妖艶に。それでいて、どこか抗いがたい重圧を感じる。

「ゲームをしよう。君の日常をかけて。…オレもね、一方的に奪うのは好きじゃない。だから君みたいな女の子にチャンスを与えることにしている。ルールは簡単だ。今からしおりちゃんのクリト

リスを刺激する。その吸引器で。君には、30分それに耐えてもらう。それだけで家に帰ることができる」

「そ…それだけ？」

絶対そんなはずなのに、つい聞き返してしまった。

「基本ルールはね。もちろんそれだけじゃない。敗北条件はただ一つ。君のお股の間にあるグラスを倒すこと。倒したらその時点でゲームオーバー。ペナルティとして、残り時間の二倍を耐えてもらう。そして君は人として終わる。刺激的でしょ？」

あ、ちなみにグラスの中身は超強力な媚薬だから気をつけてねと付け足し、鑑ハルは締めくくった。現実味を感じないほどの内容をいとも簡単に言っただけで、……全く理解が追いつかない。それでもただ一つ言えるのは、私がこれから…、何かとてつもなくひどい目に合されるらしいということだ。息があがる。背筋は恐怖でぞくぞくと悪寒すら感じるのに、空調だけはむしろ整って、快適ですらあった。

「はは。しおりちゃん、緊張しているところ悪いけど…時間ももったいないし、そろそろ始めちゃうか」